



漆金薄繪盤 甲



漆金薄繪盤 乙

漆金薄繪盤（香印坐）二基

香印坐は奈良時代の香具で、仏前に供したものである。正しくは香印坐花と称したようで、甲号と乙号のほぼ同大、同意匠のもの二基が現存している。その姿は岩座の上に蓮華が大きく花開いた形に造られ、八方四段、都合三十二枚の蓮弁が金色と極彩色に包まれて豪華絢爛たる装いを示している。数多くある正倉院宝物の中でも一際光彩を放つ傑出した存在である。

しかし、いま見る現状の姿は、かならずしも当初のものそのままを伝えていたとはいえないがたいようだ。蓮肉（中房）部がお盆のように一段彫りくぼめられている。もとはここに鍛造の銅盤が装置されていたと考えられ、また、この盤の上には蓋形の火屋が付属していたであろうと推測する。その火屋の形は唐や百済の遺例、あるいは敦煌莫高窟の壁画などから充分に推測が可能である。香印坐は二基を一对として用いたものとは考えがたく、一基ずつ仏前に供し、一基は代替用としてつねに用意せられていたものと考ええる。仏前に供するときは、岩座の下に褥や案・几が用意されたであろう。蓮弁は挿蓮弁に似て、根元のところに銅板が補足され、これが四枚重ねて岩座に鋳留めされるが、その銅板の最上面に「上一」（甲号）「下一」（乙号）の鑿による刻銘のあることが判明した。

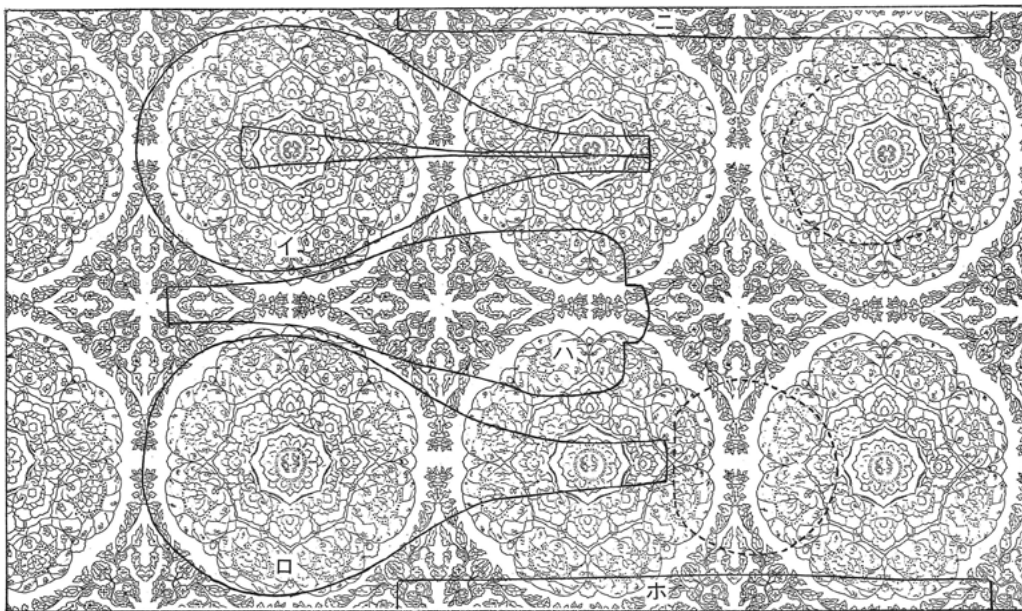
文献によると東大寺阿弥陀院に香印坐花が二株あったと記されており、いまに遺るこの二基の香印坐がそれに相当する可能性も充分にある。

（光森正士）

（撮影 山中五郎）



琵琶袋模造品 姿・裏・側面



錦の裁断位置の概略図

——正倉院の残片

……東京国立博物館法隆寺宝物館の残片

### 琵琶袋の錦残片について

琵琶の絃の上に覆い被さる垂れ状の部分の錦（上図ハ）の文様が副文の中心を含むことから、本件錦が通例の錦の約二倍の広さの二葉（一幅に主文が二つ並ぶこと）の錦であると考えられている。

琵琶袋の表面の錦（上図イ）と裏面の錦（上図ロ）の周囲の裁断線及び糸目を検討すると、広幅の錦であることを考慮して、両者が隣接する位置（上図参照）で裁断されたと考えるのが最も妥当であることがわかった。したがって、錦の裁断は上図のように行なわれ、琵琶袋一口を製作するために文様三単位分の長さの錦が必要であったと考えられる。なお、袋の側面の褶の部分の錦（上図ニ、ホ）は今では部分的にしか残っていないが、残存部分の文様から、上図のような位置で裁断されたと推定できる。

最後に、琵琶袋の残片以外同じ錦が全く発見されていないことと、文様、色彩、製織技術のいずれもが頭抜けていると考えられることから、現在では、この錦は八世紀頃中国で製織され琵琶袋として日本に舶載されたと推測されている。ただし、舶載品であることはおそらく間違いの無いところであろうが、中国でもまだ同じ文様の錦は発見されていない。

（尾形充彦）

（撮影 山中五郎）